高岡町埋蔵文化財調査報告書第３集

高岡町内遺跡発掘調査報告書

１９９３

宮崎県高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書第３集

高岡町内遺跡発掘調査報告書

１９９３

宮崎県高岡町教育委員会

序　　文

近年、埋蔵文化財をとりまく環境は、大変きびしさを増しております。そのため、高岡町でも、昨年度までに遺跡の詳細分布調査を終らせ、その成果に基づき、今年度から開発に伴う調整を目的とした事前総合調査を実施しました。この報告書はその調査の一部をとりまとめたものです。この報告書が、今後の文化財保護の基本的指標となることを期待します。

最後に、この調査にあたりご協力頂いた方々に厚くお礼申し上げます。

高岡町教育委員会

教育長　篠　原　和　民

例　　言

1.　本書は高岡町教育委員会が平成４年度に文化庁・宮崎県教育委員会の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2.　調査は次の体制で行った。

調査主体	高岡町教育委員会	
	教育長	篠原和民
	社会教育課長	岩崎健一
調査担当	社会教育係	島田正浩
庶務担当	〃	〃
調査指導	県文化課主査	石原悦雄

3.　報告書作成にあたっては、柚木崎加代子の協力を得た。

4.　遺物においては、石川悦雄氏、大橋康二氏（九州陶磁文化館）に御教授頂いた。

5.　本書の編集は島田がおこなった。

目　　次

Ⅰ．はじめに

1.　高岡町の歴史的環境 …… 6

2.　調査の目的 …… 6

Ⅱ．調　査

1.　城ケ峯遺跡 …… 8

2.　橋山第１遺跡 …… 9

3.　高岡麓遺跡 …… 11

4.　穆佐麓遺跡 …… 14

5.　穆佐城址 …… 15

Ⅲ．まとめ

第１図　高岡町遺跡分布図 …… 7

第２図　城ケ峯遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図 …… 8

第３図　城ケ峯遺跡土層図（南面一部分）…… 9

第４図　城ケ峯遺跡出土遺物実測図 …… 9

第５図　橋山第１遺跡Ｃ地区周辺地形図及びトレンチ配置図 …… 10

第６図　高岡麓遺跡周辺地形図 …… 11

第７図　高岡麓遺跡トレンチ配置図 …… 12

第８図　高岡麓遺跡第２Tr井戸実測図（ 1／30）…… 13

第９図　穆佐麓遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図 …… 14

第10図　穆佐城址縄張図 …… 16

第11図　穆佐城址トレンチ配置図 …… 17

図版１　橋山第１遺跡Ｃ地区第４Tr …… 10

図版２　高岡麓遺跡第２Tr井戸 …… 12

図版３　高岡麓遺跡第２Tr井戸 …… 12

図版４　穆佐城址空堀 …… 17

Ⅰ．はじめに

1．高岡町の歴史的環境

高岡町は中央に大淀川が流れ、その支流となる小河川が谷と小台地を形成している。その台地の多くは町内の東側に位置し、火山灰の埋積がみられ、遺跡立地のうえで好適地である。

高岡町ではそれらの台地のほとんどに遺跡が存在している。

まず、旧石器時代では浦之名久木野周辺で遺物の表採が確認されている。

縄文時代では、早期と後期の遺跡が多い。縄文時代早期は、橋山第１遺跡・天ケ城址・宗栄司遺跡があり、集石遺構に伴い押型文土器が出土している。縄文時代後期では山子遺跡で貝殻文土器の表採がみられる。

弥生時代では学頭遺跡があげられる。この遺跡は河川に狭まれた微高地に位置する弥生時代後期を中心とした生活遺跡である。またこの遺跡は古墳時代の須恵器杯なども採取される。古墳時代の須恵器は久木野・水流口・城ケ峯・二ツ塚の各遺跡周辺でも採取されており、それらの遺跡は古墳が集中しているところでもある。

歴史時代に入ると、まず10世紀の土師器生産遺跡である蕨野遺跡がある。ちょうど高岡が「穆佐郷」といわれていた時期であり、この時期の遺物は、付近の他の遺跡でもみることができる。その後、武家社会の時代に入ると、山の地形を利用した山城（城郭遺跡）が出現する。町内では、現在確認されているものとして10ケ所以上にのぼる。また城郭遺跡以外でもこの時期になると町内全域に広がりをみせる。この時期の中心地は穆佐城周辺であったのに対し、近世になると天ケ城周辺に一変する。薩摩藩は天ケ城と穆佐城の裾地に武士の居住地（麓）を形成する。特に天ケ城の高岡麓においては、計画的な街路設計がなされ、城下町の形態をもつ。この時期の遺跡は、麓を含めて現在の居住地となっていることが多く、遺跡の表採も陶磁器類が多い。

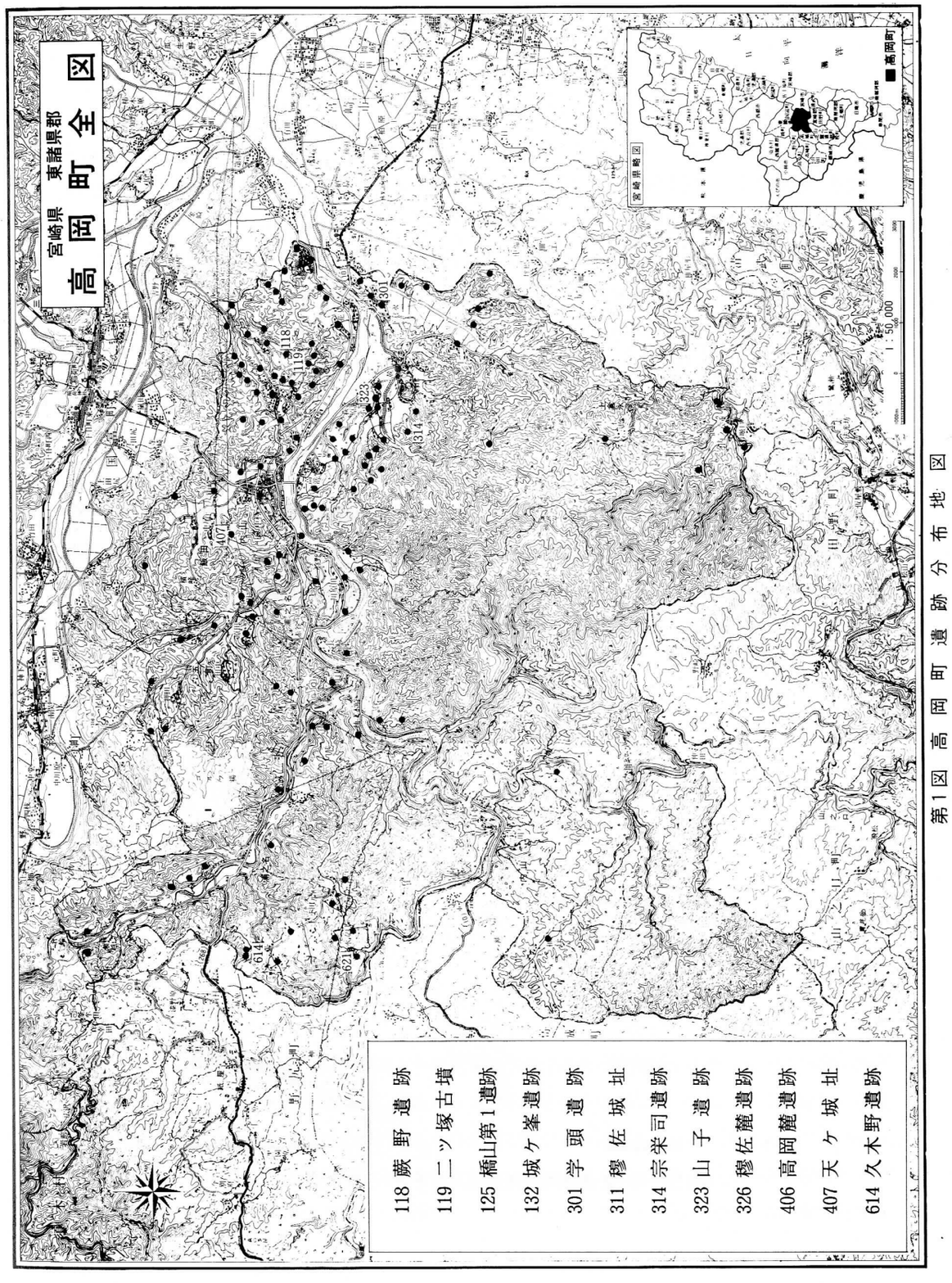
註 (1) 和名抄

2．調査の目的

近年、相次ぐ開発の増加により、埋蔵文化財の取り扱いが問題になってきている。

高岡町では、平成４年３月に「高岡町遺跡詳細分布調査報告書」を刊行し、町内遺跡の周知を行なった。それに基づき、周知遺跡内又はその周辺において開発を行なう場合のみ事前に試掘調査を実施し、遺跡の性格、保存状態等を確認することによって、文化財保護の立場から開発との調整に資するものである。

今年度は、公共事業や民間開発に対応するため、町内における開発の中で５ケ所以上において試掘調査を実施した。これらはすべて、文化財保護法により埋蔵文化財調査が義務付けられているための処置である。



第1図 高岡町遺跡分布地図

Ⅱ. 調　　査

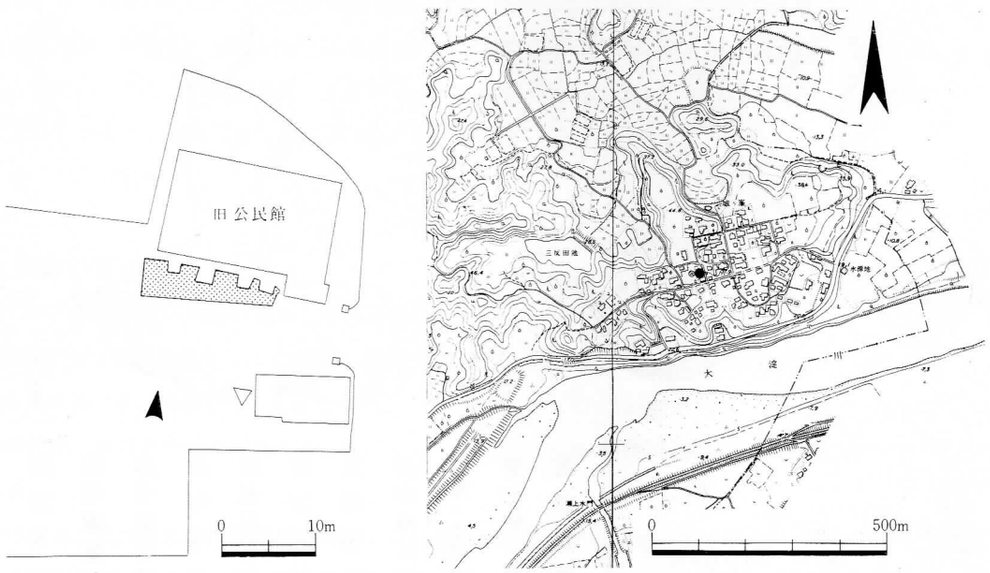
1. 城ケ峯遺跡

a） 調査の目的と経過

現在、高岡町では、農業農村活性化農業構造改善事業を進めている。その事業の一環で城ケ峯地区に研修施設の建設が計画された。そのため、農業振興課と教育委員会とで協議し、建物範囲に限り試掘調査を実施することとなった。城ケ峯遺跡は花見貝塚が在るところであるが、範囲や保存状態など詳細は不明である。また、県指定古墳が付近に在るがこれも詳細は不明である。これらのことから、遺跡の有無の確認以外に遺跡の性格等も十分把握することを調査の目的とした。調査は平成４年９月25日〜10月１日の７日間実施した。トレンチは、既存の建物や植木等を避けたため変形した配置となった。そのため掘削等に時間を要し、掘削深度が増すにつれ排土処理に難が生じ、一部重機を使用している。

b） 調査

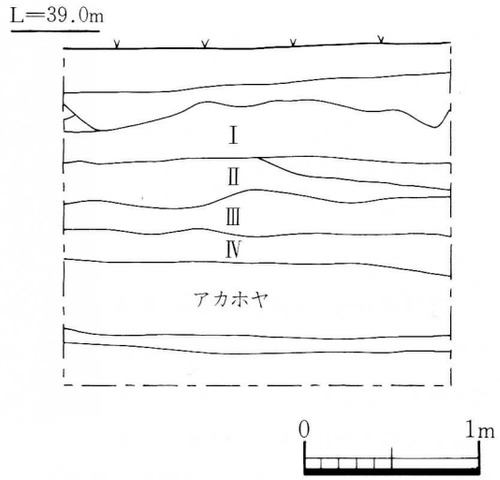
調査は長さ約11.5*m*の試掘抗で行なった。西側が戦後の家屋の基礎等でかなりの撹乱を受けており、表土下約50*cm*の深さまではその家屋放棄後の整地がされていた。Ⅰ層（7.5YR3-１(1)）は、底部痕跡が糸切りやヘラ切りの土師皿や、弥生後期後半の遺物が出土した。中世期以降の整地層と思われる。Ⅱ層（7.5YR２－１）は、弥生後期後半の中型甕や壷、そして６世紀頃の須恵器や土師器の甕などの土器片が出土した。



第2図　城ヶ峯遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図

Ⅲ層（7.5 YR ２−２）は、弥生後期後半の遺物を中心とするが、一部縄文早期の押型文土器や後期の貝殻条痕をもつ土器の出土があった。

Ⅳ層（Hue 10 R1.7） は、縄文後期の遺物が中心に出土した。その下の層はアカホヤの埋積がみられるが、その上面から段を成す落ち込み（土壙）が北西側で確認された。アカホヤ層は約40*cm*程の埋積で、その下は黒色のハードローム層そして、淡灰茶色粘土層と続く。アカホヤ層より下層では遺物の確認は出来なかった。

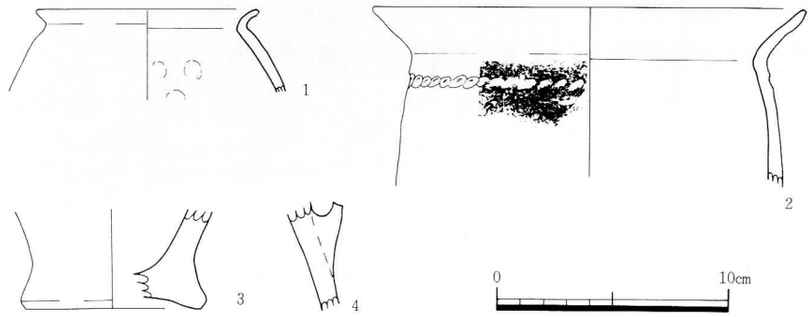


第3図　城ヶ峯遺跡土層図（南面－部分）

注 (1) 標準土色帳

c） まとめ

この遺跡は、遺跡の立地条件が良好な為か、遺物で見る限りでは、長期間の存在が認められる。それを分けると縄文早期・後期・弥生後期後半・６世紀中頃の４時期になり、それ以外で中近世が加わる。縄文早期の遺物については花見貝塚、そして６世紀中頃の遺物については城ケ峯古墳とそれぞれ関連性があり、今後、範囲確認を含めた調査が必要である。



第４図　城ヶ峯遺出土遺物実測図

2. 橋山第１遺跡Ｃ地区

a） 調査の目的と経過

平成４年９月初めに高岡町役場開発課より花見工業団地付近での民間開発に伴う文化財の取り扱いについて協議があった。開発予定地は、台地から大淀川に延びる尾根の一端で橋山第１遺跡Ａ・Ｂ地区の北側に位置する。ここは南側に平坦地をもち北側でなだらかに落ちるみかん園である。この開発予定地は周知の埋蔵文化財の範囲には含まれていなかったが、すでに当教育委員会が橋山遺跡Ａ・Ｂ地区（縄文早期）の発掘調査を実施した実績がある。そのため、開発予定地が遺跡である可能性が高

いことから、それを確認するために、地権者の同意のもと、試掘調査を実施した。調査は10月12日〜15日の４日間実施され、幅約1.5ｍのトレンチを５ケ所設定し掘削している。

図版１　橋山第１遺跡Ｃ地区第４Tr

b）　調査

第１トレンチ

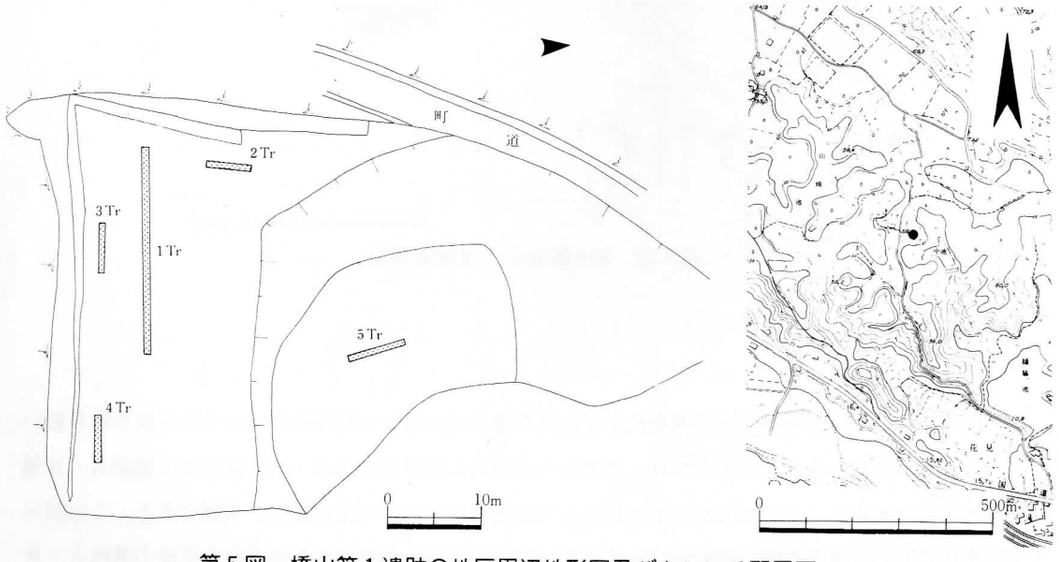
長さ22ｍのトレンチを調査区平坦面中央に東西方面へ設定した。層位は耕作土の下、アカホヤ、カシワバン、褐色土、シラスを含む褐色土という状態であった。トレンチ東側で、土器片（押型文）が数片のみ褐色土層内から出土した。

第２トレンチ

調査区西側に町道と平行する方面に長さ５ｍのトレンチを設定した。アカホヤ土層は攪乱を受けトレンチ南側に若干残っているだけで、耕作土の下は褐色土が広がっていた。褐色土層は厚さ約20㎝ほどで礫の出土があった。

第３トレンチ

第１トレンチの南側に第１トレンチと平行するように設定した。長さ５ｍのトレンチである。層位の状況は第１トレンチと同様である。褐色土層内から焼礫が数点出土した。



第５図　橋山第１遺跡Ｃ地区周辺地形図及びトレンチ配置図

第４トレンチ

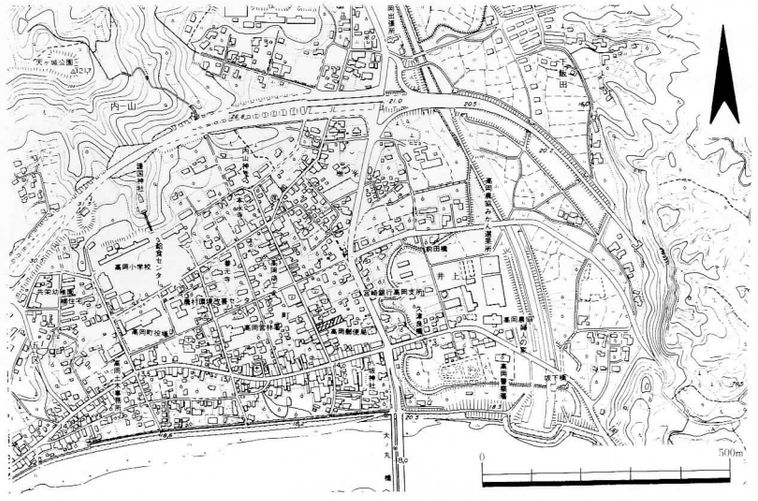
第３トレンチの東側に、同方向で長さ５ｍのトレンチを設定した。層位は第１・３トレンチと同様な状態である。褐色土層内において剝片（チャート）を出土した。

第５トレンチ

調査区北側のなだらかに落ちたところに、南北方向へ長さ６ｍでトレンチを設定した。かなり耕作土が深く1.5ｍ以上をはかり、その下にアカホヤ土層の埋積がみられる。

C）　まとめ

調査において、層位の埋積状況は良好であり、褐色土層内から縄文早期の遺物等が検出された。これは、橋山第１遺跡Ａ・Ｂ地点の状態と同様であり、当時の集落遺跡が推定される。遺跡の広がりは、北側の谷状のところは遺跡の存在は考えにくく、第１〜４トレンチを設定した平坦面のみに限定したい。



第６図　高岡麓遺跡周辺地形図

3.　高岡麓遺跡第１地点

a）　調査の目的と経過

平成４年10月に高岡病院から職員寮建設に伴う申請があった。これにより、建物の建設予定地が近世の高岡麓内に位置し、その関連の遺跡の周辺であることから、教育委員会は高岡病院に対し遺跡であることを伝えた。そして、文化財保護法第57の２項をもとに両者で協議を行ない、試掘調査をすることとなった。

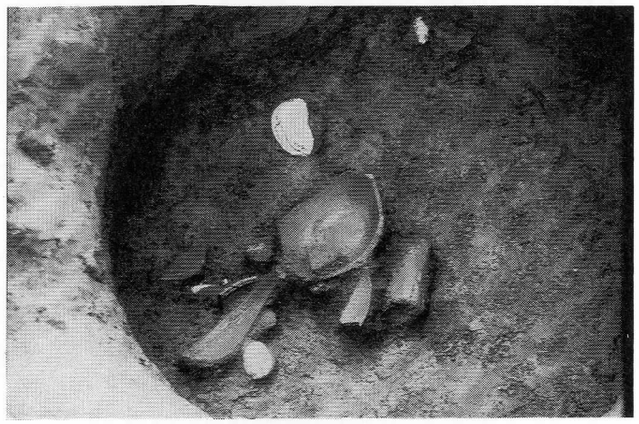
この高岡麓は、薩摩藩の外城であり、武士の居住地として整備されたところである。平成３年と４年にかけて鹿児島大学工学部建築学科の土田充義教授のもとで麓計画に関する調査が行なわれた(1)。

その結果、この麓は直線街路で計画的な町割がなされており、出水麓などに似た特徴を持つなど、この麓の重要性を再確認したものとなった。

この調査から、今回の開発予定地は敷地が短冊形であり町屋の一部に相当するところである。また、この予定地東側には19世紀初頭と推定される本吉家住宅が存在している。

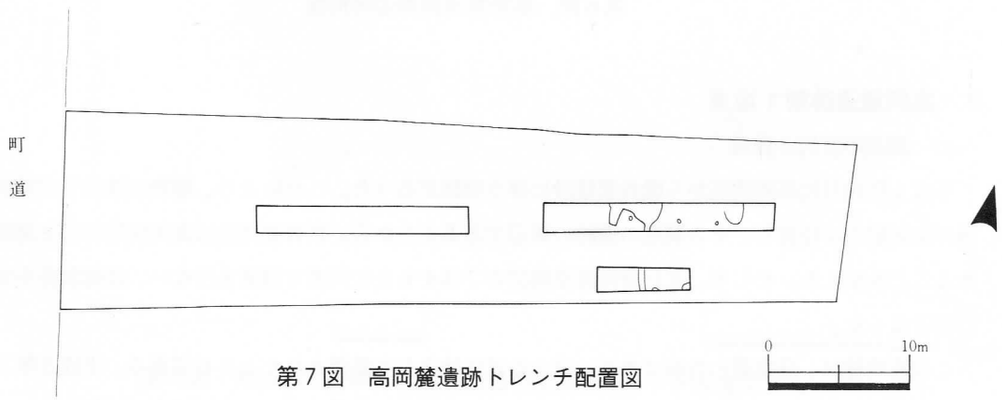
以上のことから、この開発予定地を高岡麓遺跡第１地点とし、平成４年10月28日〜11月２日の６日間、トレンチ法による調査を実施した。トレンチは、まず建物予定地内の北側に長さ15m、巾２mで２本設定した。掘削後東側のトレンチで遺構が確認されたため、そのトレンチに平行して南側にトレンチを新たに設定した。また、調査の途中、当町水道課ならびに㈲盛産業には多大な迷惑をかけた。

図版２　高岡麓遺跡第２Tr 井戸



図版３　高岡麓遺跡第２Tr 井戸

註 (1) 薩摩藩領内の「麓」計画に関する研究、鹿児島大学　1992年



第７図　高岡麓遺跡トレンチ配置図

b）調　査

第１トレンチ

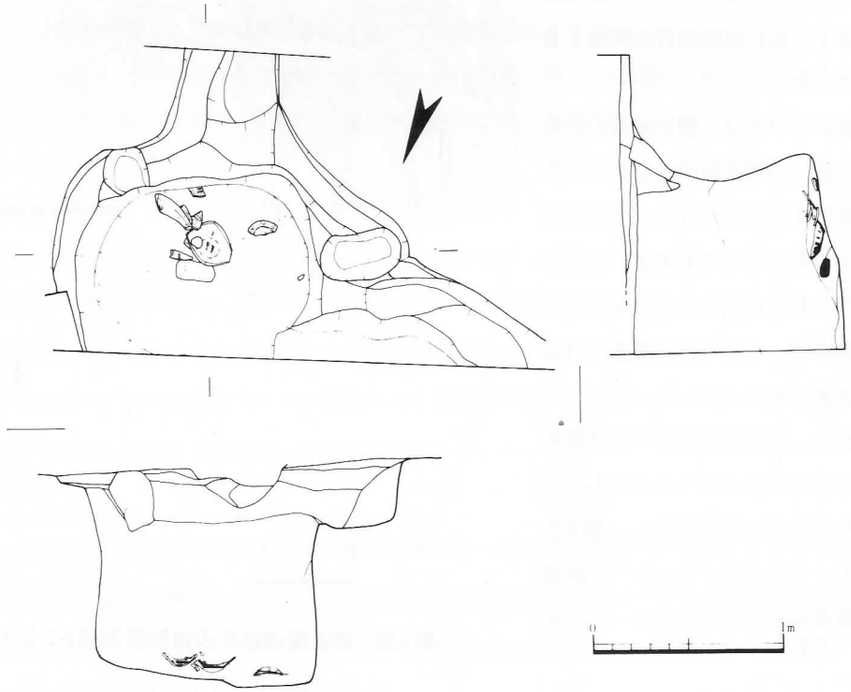
調査地の表土は、以前盛土をしたことがあり堅くなっていたため、重機を使用した。表土下は淡褐色粘土層でその下に炭を含む淡黄褐色粘土層が約60cmの深さで埋積している。そして淡黄褐色弱砂性土層となり、明黄褐色粘性土、黄灰色砂性土となる。このトレンチは西側で攪乱を強く受けているが、埋積状況は平坦な様相をみせる。遺構は確認されていない。

第２トレンチ

土層の埋積は第１トレンチと同じ様相をみせる。第２トレンチでは明黄褐色粘性土（１m〜1.2m深）上面で、土壙と井戸が確認された。

土壙はトレンチの東側で検出された。長楕円形をなし、深さ10cmほどで床面は平坦である。土壙壁面より土師質の鍋が出土している。

井戸は、円形の素掘りで、床面径1.1mで西側で低く中央部で段をなす。深さは約1.1mをはかり、断面袋状をなす。掘削面は黄灰色砂層下の粘土層上面までである。南側と西側に溝状の遺構をもち、その溝と井戸との接続部横にはピットがある。井戸に対する一連の施設である。遺物は、最下層の灰色粘土（炭混入）層とその上の灰茶色粘土（黄色粘土と炭混入）層から多く出土している。最下層



第８図　高岡麓遺跡第２Tr井戸実測図(1/30)

（図版３）からは、摺鉢（原無田）や染付皿（肥前18Ｃ後半〜19Ｃ初頭）が出土した。

第３トレンチ

土層状況は他のトレンチと同様である。トレンチ西側に第２トレンチの溝に続くと思われる溝が南側に延びていた。その溝の東では掘形のしっかりしたピットが検出された。遺物は土師器片が数点のみ遺構検出面より出土した。

Ｃ）　まとめ

調査区の西側は攪乱が著しく、現段階では東側に遺構の存在を認めるしかない。

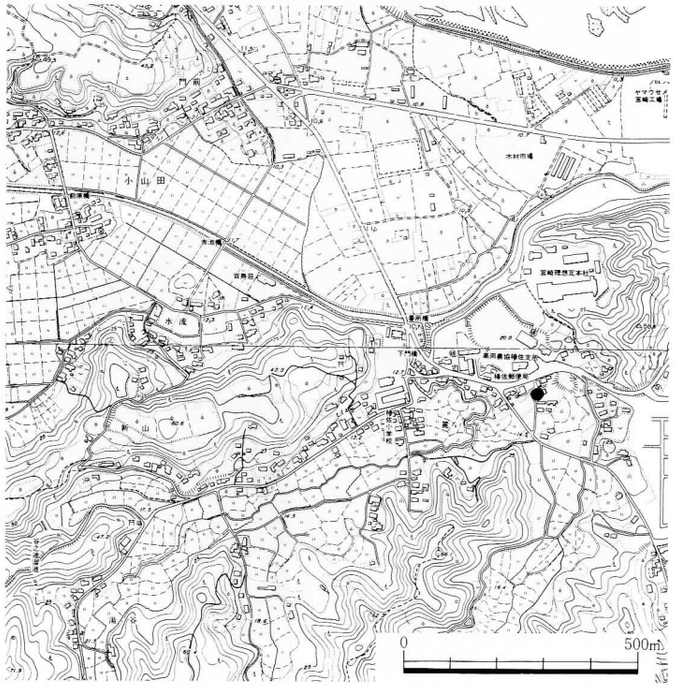
4．穆佐麓遺跡

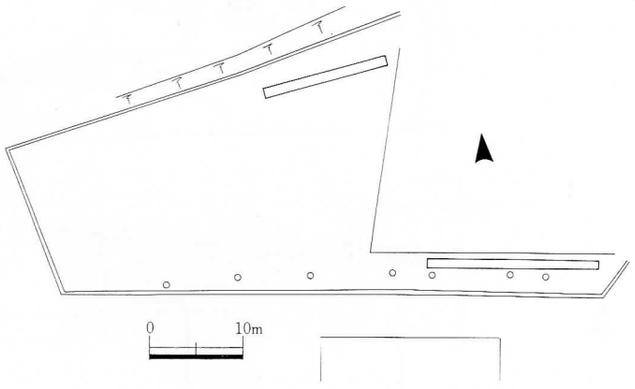
a）調査の目的と経過

当教育委員会は、企画調整課ならび建設課と町営住宅建設に伴い協議を行なった。その結果、今年度は造成のみを行なうということから、その造成工事が始まる以前に試掘調査を実施することとなった。

穆佐麓については、穆佐城周辺を基盤とし中世では穆佐院を中心として発展し、近世では外城のひとつとして取り立てられたところでもある。しかしながら、それらに関して十分な資料は残っておらず、今回の確認調査では範囲確認の意味も含んでいた。

調査地は、以前田畑でその後保育所が建てられていたということであった。現在は町営住宅の駐車場として使用されており、そのためにトレンチの設置場所が調査区範囲の片隅となってしまった。調査は平成４年11月11日〜12日の２日間実施した。





第9図　穆佐麓遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図

b）　まとめ

トレンチは、同一方向に２ケ所設定した。両トレンチとも約40〜50cmの深さを掘削したところで暗青灰色粘土となった。遺物ならびに遺構等は確認されなかった。

5．穆佐城址

a）調査の目的と経過

高岡町は、穆佐城の活用として、都市公園化するなどの計画が以前からなされていたため、教育委員会では城址の規模と各曲輪の性格、そして保存状態の把握が急務となった。

そのため、平成２年度は縄張図を作成し（第10図）、２年度と３年度に試掘調査を実施している。それらの調査で10本のトレンチを掘削し、一部ではあるが曲輪の性格や保存状態をある程度確認し終えた。今年度は特に空堀の部分にトレンチを設定し、その部分の状況を把握することにした。調査を実施した空堀はＡ地区とＢ地区を分けるところの堀である。

トレンチは、堀の方向に対して直角になるように４ケ所設定した。調査当初は、この空堀の続きで北側の帯曲輪までトレンチを設定する予定であったが、先に設定したトレンチの深度が予想よりもかなり深く、今回の調査は空堀の部分のみとなった。尚、この調査と前後する時期に、遺跡を保護・活用する意味から史跡公園化する構想が出され、新たな局面をむかえている。

予想よりもかなり深く、今回の調査は空堀の部分のみとなった。尚、この調査と前後する時期に、遺跡を保護・活用する意味から史跡公園化する構想が出され、新たな局面をむかえている。

b）調　　査

第11トレンチ

空掘の床面の状態を確認するためのトレンチで、長さ約16ｍ、巾約1.5ｍで掘削した。まず、曲輪１の壁面崩落による埋土を除去し、層ごとに掘削を試みた。掘削後約50cmのところで西側に、硬化面（戦後？）を検出。この時点で埋積深度が大きいものと判断し、掘削面を約半分にした。埋積状況をみると灰褐色気味のシラスと白色シラスが幾度となく埋積し東側に落ちている状態である。約2.5ｍの深さの掘削内では、生活面（使用面）の確認は出来なかった。

第12トレンチ

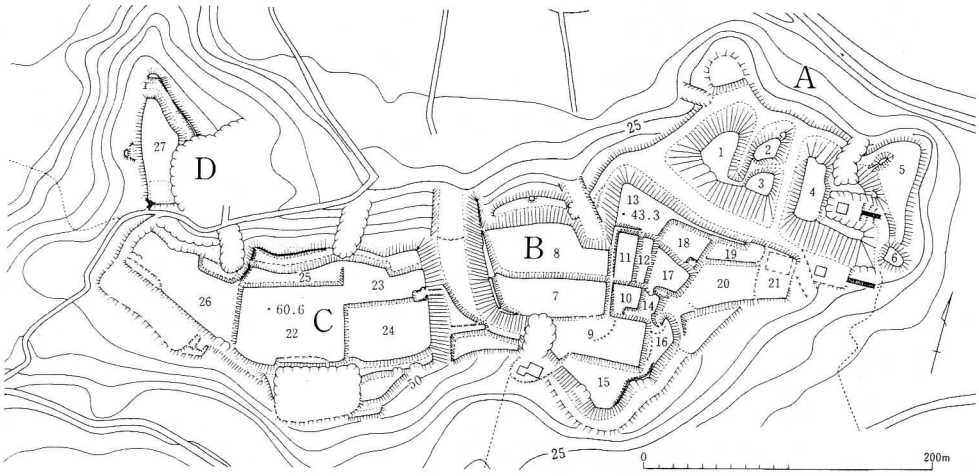
第11トレンチで床面の検出が出来ず目的が達成出来なかったため、同じ目的で第１トレンチより北側約15ｍのところに設定し掘削した。このトレンチでは埋土は両端を除いて平坦な埋積状況を示し、約1.8ｍの深さを掘削したところで灰白色（地山）を検出した。床面は、一部落ち込み（遺構？）がみられるものの全体的に平坦をなし人為的である。

第13トレンチ

第12トレンチから北側は、堀が段をなして巾広に落ちていく。曲輪１と曲輪13の間で帯曲輪から空堀へ続く入口部分にトレンチを設定し、遺構の確認も合わせて行なった。しかしながら遺構は確認されなかった。

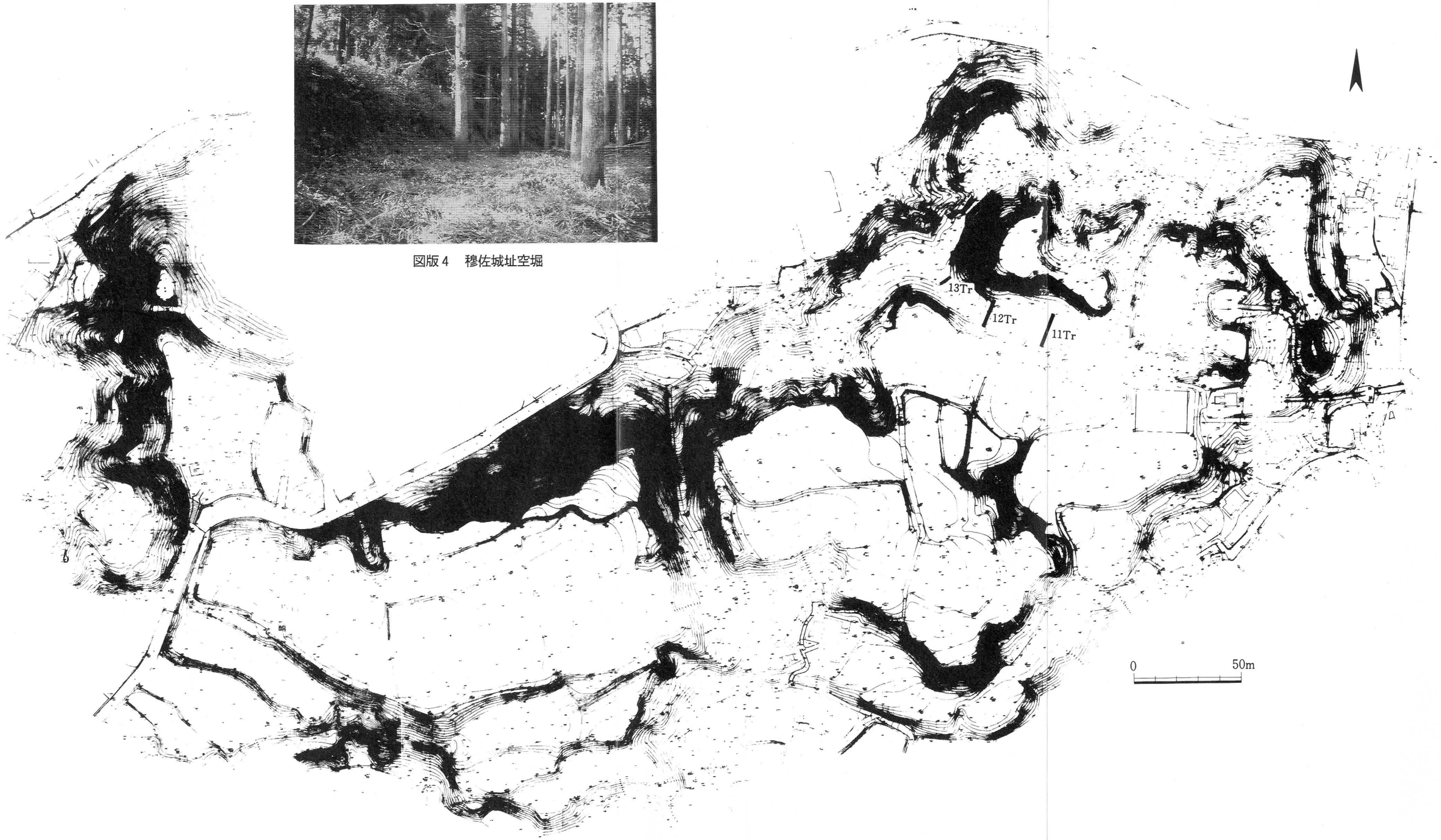
c）まとめ

各トレンチからは流れ込みの状態ではあるが、土師皿、輸入陶磁器等、中世の遺物が中心に出土した。また、押型文土器や弥生後期の遺物も数片ではあるが出土している。空掘に関しては深く埋積しており、当時は今以上に大規模な堀であったことがうかがわれる。



第10図　穆佐城址縄張図

図版４　穆佐城址空堀



第11図　穆佐城址トレンチ配置図

Ⅲ. ま　と　め

周知の遺跡内での開発行為は、高岡町においても年々増していく傾向にある。また、大規模開発にしても、不況期とはいっても計画は進行中であり、遺跡破壊の危機は一向に変らない。今年度（昨年２月～今年１月末日）の建造物建築における周知遺跡内でのその件数は、約30件であるが、そのほとんどが木造建築であり、遺跡にさほど影響を与えないことが救いとなっている。しかしながら、今まであまり問題視されていなかった農地の耕作において、作物の栽培方法の変化（技術的向上）により、深耕する方法が採用されるなど、新たな問題も生じている。

それらに対応していくためには、住民への周知と早期の協議は不可決であるが、調査に対する十分な財源確保と調査員の充実も合わせて努力されなければならない。

高岡町内遺跡発掘調査報告書

平成５年３月

編集・発行

宮崎県高岡町教育委員会
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山

印刷　富士マイクロ株式会社

宮崎市埋蔵文化財センター・遊古館